

## 特集「癒しの現在—医療技術関連職種の歴史と今日の課題—」によせて

松 本 雅 彦

京都大学医療技術短期大学部記要・別冊「健康人間学」の第7号は、「癒しの現在—医療技術関連職種の歴史と今日の課題—」という特集を組んで、看護学科、衛生技術学科、理学・作業療法学科、助産学特別専攻科、一般教育に所属する教官から、それぞれの学科の歴史と今日の課題を提出していただいた。

医学・医療は、かつてのように医者と看護婦とによって営まれるだけのものではなくなり、医療技術に携わる多くの人たちの協力によって成り立つ営みとなった。「チーム医療」という言葉も、すでに馴染みのものとなっている。しかし、この「チーム医療」という言葉は、はたしてどこまで内実あるものになっているのか。

病いを「治し」「癒す」という営為は、その初期の診断には、医師だけでなく、臨床検査技師、放射線技師、看護といった医療技術関連職種にある人たちの協力がなくてはならない。またその回復期、社会復帰期には、看護をはじめとして、理学療法、作業療法などリハビリテーション専門の技術も要請される。病むことに必然的に伴う「こころの痛み」には、それ専門のカウンセラー（臨床心理士）の関与がなくてはならないだろう。さらには病者の生活にまでかかわるべきケース・ワーカー、地域での保健活動にかかわる保健婦など、多様な医療・福祉関係の人たちの参加が要請されるようになっている。かつての急性疾患が減少し、人口の高齢化に伴う疾病構造の変化、慢性疾患の増加などは、いっそう「癒し」の重要性を浮き彫りにしている。このような変化を踏まえて、近年の社会福祉士、介護福祉士などの導入を加えると、医療・福祉に携わる職種は50を越えることになるだろう。

「治し」「癒す」という営為が多様化し、それに応えるべく多様な医療技術関連職が生まれしてきた。それは家族・社会構造の変化と、その変化から生まれたニーズに応えるべきものでもあった。しかし今日といえども、この医療関連職種の営為はまだ十分に認識され検討されているとはいいがたい。

さらにその医療技術関連職種個々の内部にも、この数十年著しい発展と変遷とが起きている。罹病以前の健康管理・増進の領域も含めて、各医療関連職種にある人たちは自らの独自性とアイデンティティとを求めて、日々模索しているはずである。

本特集では、多様であるべき医療関連職種の数分野でしかないが、当医療技術短期大学部にあって保健・医療・福祉の領域にかかわろうとする人たちのそれぞれから、これまでの発展の歴史と今後の展望をも含めた現在の課題が提出されている。

当京都大学医療技術短期大学部も本年で創立20周年を迎える。この特集が、過去20年の中間総括となり、今後も社会的ニーズに応えるべき課題を模索して、さらに新しい飛躍のためのスプリング・ボードとなればと思う。